

# 文學博士久松潛一君著「日本文學評論史」に對する

## 授賞審査要旨

本書は、著者が日本文學評論の史的研究を遂げその成果を總括したるものにして、三冊より成る。即ち初二冊を古代・中世篇及び近世・最近世篇となし、別の一冊を總論・歌論篇となす。

著者は先づ序論に於て一般に文學評論史の可能を説きてその限界を定め、且つ批評と創作との關係に論及し、進んで文學評論史の扱方と組織とを考察したる後、第一編に於て本邦古代に於ける文學評論の發生と完成とを探尋し、第三編に於て中世に於ける文學評論の理念とその進展とを檢討せり。

著者は古代に於ける文學意識の發生を和歌の成立及び發達の上に求め、殊に短歌形式の成立より見たる統一美の意識を高調し、上古に在りては、萬葉集の撰集態度と批評精神とを解析し、中古に在りては支那の詩論と日本の歌論との關係を考證し、歌合の起原及び判詞に就いてその文學評論的意義を闡明せり。著者は斯くの如く文學評論の發生成立を觀察し、韻文の方面に於ては、古今集等の序文に現はれたる文學論を剖析し、進んで歌論書の成立と性質とを考察せり。散文の方面に於ては、源氏物語を主要動機として發達したる文學論を討究して、寫實「ものあはれ」餘情の關係を説きて後この種類の文學評論完成がやがてその分裂を來たすに至れる徑路を説明せり、而して其材料は主として歌

論を典據とし、傍ら物語類を資料となし、以て古代篇を結べり。

第二編中世篇に於て、文學評論理念の進展を詳敘するに當りては、歌論の外、連歌論及び能樂論を資料とし、三者の相互關係を説明し、文學の宗教化と共に文學道の建設に至りし徑路を概觀し最後に文學論の傳統化固定に陥れる跡を稽へ、法式・型・傳授等の成立を觀察し、以て中世篇を結びたり。その間、中世歌論を中心として著しく發展し來れる幽玄美の概念を細論して、之に關する諸家の見解を批判し、平淡美と素樸美と官能美との對立を精敘し、且つ特に無名草子に現はれたる物語の本質論に基きて、物語批評に於ける優美性を明徵せり。

第三編近世篇に於ては、文學評論の古典的傾向と近世的傾向との對照を力説せり、即ち近世初期に於ける文藝復興が自然愛と現實的精神とに由りて、傳統的文學評論を排除しつつ、契沖等國學者間に於ける近世歌論及び物語論の建設を促がし、一方には儒學的文學評論を促し、他方には俳論の發生を見るに至りし經過を敘述せり。次いで近世文學評論と古典文學との關係につきては、萬葉・古今・新古今三歌集に對する各種の批評と共に歌格研究の發展を考察し、言靈論の擡頭に論及せり。かくて近世歌論に於る現代派の新傾向を研鑽し、更に近世文學評論の檢討に進み俳論狂歌論に於る「まこと」・「さび」・不易流行・虛實・「なぐさみ」等を精査せり、最後に勸善懲惡主義の文學評論檢覈を以てこの一篇を結べり。

第四編には最近世に於る文學評論の諸傾向を敘し、明治以降西洋文學思想の影響を受け、詩歌・小説・戯曲等の作品に關する文學評論に於ける新機運を略説し、文學論に於る各種主義消長の迹を觀察したり。

著者は以上四編に於て、日本文學評論史の研究を結了したる後、稿を新にして總論一篇を附し、歌論史の再吟味を試み、以て前記各篇の遺漏を補充し、爾後の新研究を載録し、又史的觀察の概括と理論の根據とに資すべき所説を添へたり。

以上を本書の梗概となす。今之を通覽するに、著者は、古代より最近世に至るまで、文學評論の萌芽時代よりその進展、完成、固定、革新の諸時期に亘る考察を盡し、文學創作史と並びて新に文學評論史の重要な所以を明にせり。其間資料の博涉見識の徹透等本書の價値を確認せしむるに足るものあり。從來學界にはこの種の編著なきにあらざりしも、或は列傳體に傾き、或は書誌的に偏する憾多かりしに反して、著者の研究は批判的の域に進み、且つ古今を通じて廣汎なる範圍を包含せり、其努力と共に用意の周到、評論着眼の當を得たるは、學界に對する重要な貢獻といふべし。其最も力を致したる所は主として歌學歌論にあるを以て、歌論以外近世に於ける文學評論の考覈が、之に比して足らざるやの嫌あるも、向後學者の同方面に於ける研究に對して本著が有益なる基礎たるべきを見る。最近に於ける西洋文學思潮の感化に關する敘述論評は、本書に於ては主要部分に非ざるを以て姑く之

を措く、但古代中世に於ける支那の文學論及び佛教思想の影響近世漢學者の文學評論等につきて著者が多く力を注がざりし觀あるは惜むべし、之に反して我國の傳統文學たる和歌、及び之より派生せる一類の文學に對する評論の史的批判、並に其間に現はれたる美論の解析に關しては、著者が一般に卓越せる識見に富めるを知り又其間獨創の見あるを認む。